わくわく園だより　No.２１
R5 年９月８日（金）文責：牧野

幼保小の架け橋プログラム

ネットで「架け橋プログラムわかりやすく」と検索したら、～子どもに関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の５歳児から小１の２年間）に相応しい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すものです。～とありましたが、これでわかりますか？

こども園から小学校へ階段ではなく、スロープでつなげる

小１を担任したときのことです。入学式から３日後、保護者から「息子が『学校に行きたくない』と言っている。」と電話があり、すぐに家庭訪問をしました。話を聞くと「おれだけ、男の先生だから…。」というのが理由でした。学年は４クラスあって、他３人は女の先生だったのです。幼稚園時代もずっと女の先生で「男の先生はこわい！」というのです。「怖い！」と言われたのは初めてでした。

小学校には、幼稚園、保育園、こども園、その他の施設、幼児施設を経験しない子、様々な子が入学します。中には、小学校生活になかなか馴染めない子もいます。幸い訓子府は、ほぼ全員、こども園から訓小、居小に入学します。それでもこども園時代の遊び中心の生活から一変して、４５分間席について先生の話を聞かなければなりません。

入学して１週間は２時間授業で帰ります。給食もしばらくありません。教科書も最初の数ページは、イラストだけで字は書かれてありません。学校もいろいろ配慮してくれますが、逆に赤ちゃん扱いになっていることもあります。「架け橋プログラム」は、こども園と小学校の先生が連携して、さまざまな課題を解決し、スムーズに移行することができるようなプログラムを開発するものです。訓子府は、全道的にも先進的な取り組みをしています。

＊幼小連携は、５歳児の小学校入学に向けての問題ではなく、０歳から始まると思っています。

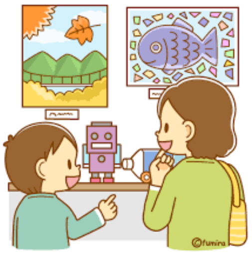
子どもの作品を展示する　住友生命絵画コンクールに多くの子が入選しました。

子どもを大切に思っていることを伝える最も効果的な方法の一つは、子どもの作品を大切に扱うことです。目立つ場所に作品を展示することです。

子どもの作品を展示することで、その作品は重要であり、親がそれを誇りに思っていることが伝わります。子どもにとって自分の作品は自己表現です。たとえ作品の良し悪しがわからなくても、親が子どもの作品を展示すると、子どもは自分が大切にされていると感じます。

まず、子どもの表現能力を評価することができます。次にやる気を喚起します。お母さんやお父さんが気に入ってくれるなら、「次はもっと上手にかこう」と子どもは思うはずです。

ひと言注意　子どもが恥ずかしいと思うモノは展示してはいけません。子どもの作品を展示することは、この子は特別な存在であり、この作品を展示することはその証であるという、親の愛情表現です。それは子どもの自尊心を育む素晴らしいメッセージになります。

「子どもが育つ簡単で大切な５０の方法」　ジャン・ダーガッツ著より

私の母は、教育書など読むことはなかったと思いますが、幼稚園の頃から、ずっと私のかいた絵や習字を飾ってくれていました。大した上手な絵ではないのに、お客さんはそれを見て、「あら、よっちゃんがかいたの、上手ねぇ～。」と（お世辞）を言ってくれます。言われると悪い気がしません。母の遺品整理をしていたら、私の絵が押し入れの奥からたくさん出てきました。